

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：33902

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21941

研究課題名（和文）瑩山紹瑾講述『伝光録』に関する総合的研究 本文成立過程の解明と資料環境整備

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Keizan Jokin's "Denkoroku"

研究代表者

横山 龍顯（Yokoyama, Ryuken）

愛知学院大学・文学部・講師

研究者番号：50880499

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：瑩山紹瑾の講述録『伝光録』の写本群について調査を行い、本文の成立過程に関する研究を行った。研究対象としたのは、最も古い形の本文を保持する写本群（古本系統）である。古本系統は錯簡の共有状況・本文の特徴的な表記によって、4種の本文系統（A群・B群・C群・D群）に分類できることが明らかになった。これらは、1つの祖本から書写の過程で分派していったことが知られる。そして、B群には現存写本よりも古い写本からの修訂を行った痕跡が見出された。これにより、散逸した祖本の段階においては、錯簡や脱文が生じておらず、B群の本文がもっとも成立当初に近い本文を有していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『伝光録』は古写本と流布本では大きく本文が異なっているが、これまでの研究においては、いずれの本文が信頼できるものであるのかという点に注意が払われることは稀であった。本研究においては、古形を保持した『伝光録』の写本群を網羅的に比較対照し、系統立てを行うことで、もっとも成立当初に近い本文が、いずれの写本に記載されているのかを明らかにした。本研究により、信頼性の高い本文に基づく『伝光録』研究が可能になったという点に学術的意義が求められる。そして、日本中世禅宗における思想の一端が明らかになることは、禅思想に淵源する日本文化の解明に寄与するという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：I researched about the process of establishing the main text of Keizan Jokin's lecture collection Denkoroku by examining its families of manuscripts. The study subject is the manuscript with the oldest main text (the old book group) among the families of manuscripts. In addition to the nine manuscripts I have researched already, four new manuscripts were examined and their main texts were compared and revised. By the state of common ownership of complex and the unique writing style of the main texts, it is revealed that the old book group is classified into four textual transmissions (A, B, C and D). It is understood that these four groups were branched in the process of transcription from the original text. At the same time, by alteration trace uniquely found in the group B, it is suggested that there was no complex or lacuna in the dispersed original text.

研究分野：日本中世禅宗史

キーワード：瑩山紹瑾 伝光録 曹洞宗 禅宗 写本

1. 研究開始当初の背景

瑩山紹瑾(1264~1325)は鎌倉時代後期に活動した曹洞宗僧侶である。瑩山は、日本曹洞宗の開祖・道元(1200~1253)から4代目の弟子で、曹洞宗が室町時代以降に全国へと展開する基盤を形成した僧侶として知られている。瑩山は、このような教団史的な側面から注目されることが多かったが、この点のみが重要なわけではなく、中世曹洞宗の思想史においても、非常に重要な位置を占めている。中世曹洞宗を思想史的に俯瞰する場合、道元の『正法眼蔵』等に見られる思想は、室町時代以降、まったくと言ってよいほど顧みられなくなる。その代わりに、宏智正覚(1091~1157)の語録(『宏智録』)をはじめとする宋代中国禅籍や抄物の研究に傾倒するようになる。このような室町時代以降の思想は「公案禅」と呼ぶ。瑩山の講義録である『伝光録』には、『正法眼蔵』をはじめとする道元の著述との相互関係を認めることができるいっぽうで、「公案禅」において重要視される「大悟」の思想や、公案禅文献で用いられる公案解説方法の萌芽が見出されることも事実である。つまり、中世曹洞宗の思想史を考える場合には、「道元から瑩山へ」、「瑩山から公案禅へ」という2つの潮流を想定することが可能であり、瑩山はまさにこれらの潮流の結節点に位置している。

このように、教団史のみならず思想史においても瑩山は重要な存在であることが知られるが、瑩山の思想については、著述として伝えられるものに真偽が曖昧なものが多かったため、研究の蓄積に乏しい状況が長らく続いてきた。瑩山の主著である『伝光録』にしても、真撰と見て問題ないことが明らかとされたのは近年のことであり(拙稿「龍門寺所蔵『正法眼蔵』の資料的価値(1)『伝光録』・『仏祖正伝記』との関係を中心に」、『駒澤大学仏教学部論集』48、2017年)ようやく思想研究を行うための足がかりが整えられはじめた段階にあると言える。

『伝光録』については、瑩山の講義録であることが確認されたものの、テキストクリティックがなされていないという大きな問題が残されている。たとえば、『伝光録』最古の写本である乾坤院本(15世紀後半書写)と流布本(安政4年1857刊本、『大正新脩大蔵経』第82巻所収『伝光録』の底本)を比較すると、一見して明らかなほど、随所に本文の改変・増広が施されている。そのため、『伝光録』を用いた思想研究を行うためには、『伝光録』の本文成立過程を明らかにし、成立当初のテキストがいかなる形であったのかを明らかにしておく必要が存する。

『伝光録』の本文については、田島毓堂氏の研究(「伝光録諸本本文の研究(1)~(3)」)により、「古本系統」(古形を保った写本群)・「中間本系統」(古本系統と流布本の中間的な本文を有する写本群)・「流布本系統」(幕末の刊本と近似した本文を有する写本群)の3系統に大きく分類されることが指摘されているものの、断片的な検討にとどまっており、網羅的な検討が行われたとは言い難い。

このような状況を背景として、既知の写本に加えて、田島氏の研究以降、新たに所蔵が確認された「古本系統」の写本群に対して網羅的な文献学的検討を行うことで、『伝光録』の成立当初にもっとも近い本文を有する写本を明らかにすることを通して、適切な本文に基づいた『伝光録』研究を可能にしたいと考え、本研究を開始した。

2. 研究の目的

『伝光録』の「古本系統」に属する写本への調査を行い、一つ一つの本文の特徴を明らかにし、「古本系統」内部における系統立てを明確にする。そのうえで、本文内容・錯簡・用字を精査し、「古本系統」内部のいずれの系統が成立当初の本文にもっとも近い形であるのかを明らかにし、適切な本文に基づいた『伝光録』研究を可能にすることを目的とする。

3. 研究の方法

- (1) 所蔵機関・寺院における『伝光録』写本の調査。新たに所蔵が確認された写本、いまだデジタル画像を取得できていない写本に関して、所蔵機関・寺院での閲覧・調査を行い、本文・書誌データを収集する。
- (2) 収集した本文を整理したうえで、比較対照させる。
- (3) 本研究開始前より継続して行ってきた研究により、古本系統は錯簡の共有具合から4種の本文系統(A群~D群)に分類されることが知られているため、新たに調査した写本がA群からD群のいずれに分類されるのかを判断する。
- (4) 古本系統の分類を整理したうえで、A群からD群の群ごとの比較対照を行う。
- (5) 古本系統の写本は、すべて錯簡が生じているが、錯簡が生じる以前の本文が『正法眼蔵』(14世紀末)に掲載されるため、それぞれと比較対照する。
- (6) 17世紀半ば以降に書写された写本については、すでに中間本系統・流布本系統が伝播していたため、中間本系統などとの影響関係が見出される可能性があるため、それらとも比較対照を行う。
- (7) 上記1~6の調査と考察に基づき、『伝光録』成立当初の本文にもっとも近い本文を比定する。

4. 研究成果

『伝光録』には、現在 31 本の写本が確認されている。このうち、「古本系統」に分類される写本は 13 本で、中世に書写されたものが 2 本、近世に書写されたものが 11 本確認されている。「古本系統」は錯簡や本文の特徴から、A 群・B 群・C 群・D 群の 4 系統に分類することができる。これらの「祖本」はほぼ同一のものであったと見られ、系統間の本文の相違は伝写の過程で生じたものであったと判断することができる。そのため、本文がまったく異なるという状況を呈しているわけではなく、微細な相違が本文の全体にわたって生じている。本研究事業の開始以前までに判明していた古本系統の関係性を示すと、図 1 のようになる。

古本系統の写本は、3 箇所
の錯簡を共有
するため、伝写
の過程で 3 箇所
の錯簡が生じた
写本(図 1
の U)が生じた
と考えられる。
この写本がさら
に書写を重ね
るなかで、新
たな錯簡(図 1
の X・Z)が発
生し、そこから
A 群と C 群が
生じた。そし
て、A 群の錯簡
への修正を試

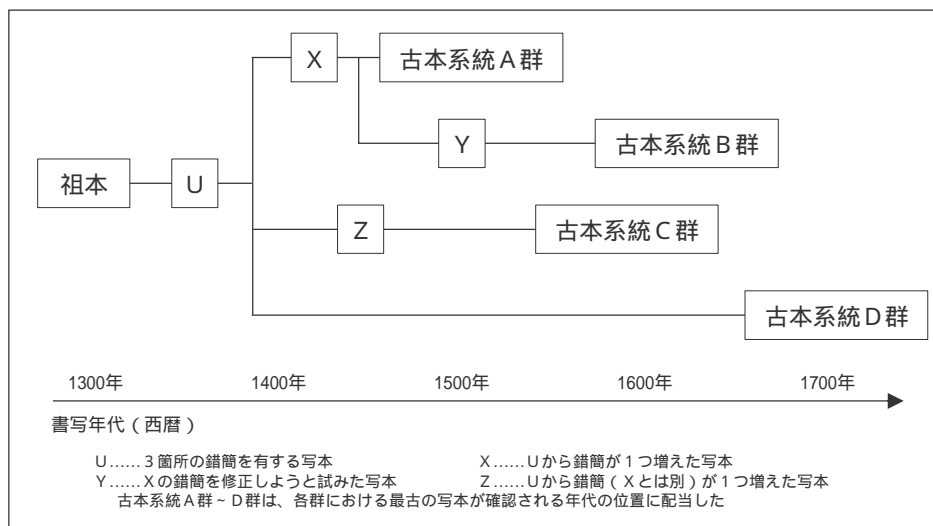


図1 研究開始以前に想定されていた古本系統写本群の成立過程

みようと
した本文を有する
のが B 群である。
B 群では錯簡箇所
を誤認し、錯簡の
一部がそのまま
取り残された状態
となっており、き
わめて特徴的な本
文を持つ。D 群に
ついては、本研究
開始以前には、端
本となっている写
本(西明寺本)しか
閲覧できておらず
、全体を確認する
ことができていな
かったため、暫定
的な系統立てを行
った。

本研究の1年目には、および龍泉寺本の調査を行った。龍泉寺本は B 群の本文を持つが、2つの注目すべき特徴が見出された。1点目は、古本系統の写本が共有する3箇所の錯簡(図1のU)が修正されている点で、2点目は中間本系統(古本系統と流布本の中間的な本文を有する写本群)に依拠して、本則を修正した痕跡が見出される点である。2点目からは、龍泉寺本の書写が、親本となった古本系統 B 群の写本を書写しつつ、中間本系統の写本も参照して、本文を修正したことを示している。中間本系統では、錯簡がすべて修正されるため、1点目に記した錯簡の修正についても、中間本系統によって行ったものと推定される。龍泉寺本のように、異なる系統の写本を同時に参照しながら書写が行われた写本は、ほかに見出すことができず、非常に貴重な事例であると言える。また、中間本系統に基づく文章の修正は本則部分にとどまっておらず、本則以外で中間本系統にしたがった修正はほとんど見出されない。ここから、龍泉寺本の書写者が重視していたのは、あくまでも古本系統の本文であったことなどもうかがいすることができる。また、龍泉寺本が中間本系統を閲覧しているところから、書写年代を比定することも可能となる。中間本系統が出現するのは18世紀半ば以降であるため、龍泉寺本の書写もそれ以降であったこととなる。

本研究の2年目には、永久文庫本(延享4年 1747 書写)・永平寺本(延享3年 1746 書写)・天林寺本(元禄9年 1696 頃書写)の調査を行った。永久文庫本・永平寺本は B 群の本文を有する写本であり、天林寺本は D 群に属する本文を有する写本で、D 群唯一の完本である。本研究開始以前に調査を行っていた D 群の西明寺本は端本のため、天林寺本の調査を行ったことで、天林寺本への検討を行ったことで、暫定的な位置づけに留まっていた D 群本文の古本系統における位置づけ(図1参照)を明確にすることができた。

D 群の本文は、C 群とほぼ等しい本文を持っている。これは、特徴的な誤字の共有などから知ることができる。たとえば、慧能章の「盗問」とされるべき箇所が「恣問」となっており、道元章の「台山」とされるべき箇所が「怠山」となっている等の例を挙げることができる。これらの特徴的な誤字の存在は、C 群・D 群が共通する写本(図2のU)から派生した系統であることを意味している。そこから錯簡が増加した系統が C 群であり、錯簡が増加しなかった系統が D 群ということになる。C 群と D 群の関係性が明確になったことにより、C 群最古の写本である龍門寺本(天文16年 1547 書写)の本来の形を復元する方が開かれた。龍門寺本は、伝承される過程で、おびただしい数の後筆が付加されているが、そのなかには、最初から記されていた本文なのか、後筆なのかを、判断しかねるものも多数あり、書写当初の本文が不明瞭となっていた(C 群に属する他の写本は、龍門寺本の写しであるため、後筆も合わせて書写されている)。しかし、D 群が C 群とほぼ同一の本文を持つことが明らかになったことで、龍門寺本の後筆箇所を特定し、書写当時の本文を復元することが可能になった。

そして、A 群から D 群を比較検討することで、現存しない祖本段階の本文についても、一定の推測を行うことが可能になった。古本系統全体を概観すると、B 群のみが有する特徴的な異文や字句の補いが確認される。以下に、B 群のみに見出される特徴を 4 点列挙してみたい。

- (ア) 弥遮迦章の末尾に記される偈頌は、A 群・C 群・D 群（以下、「他群」と総称する）では「人家多是要清白 掃去掃来心未空」という 7 言 2 句で示されるが、B 群では他群と同じ 7 言 2 句を記した後に、「前句」と断りを入れたうえで、偈頌の前に追加されるべき「縦有連〔秋〕水潔 如何春夜月朦朧」という 7 言 2 句を記載している。つまり、B 群では弥遮迦章末尾の偈頌が 7 言 2 句ではなく、7 言 4 句であることを主張する。
- (イ) 婆舍斯多章末尾の偈頌は、7 言 2 句の形を取るが、他群では、1 句目が「開花落葉直時」という 6 言となっており、1 字を欠く。B 群では、「開花落葉直彰時」という 7 言となっており、他群が欠く文字を補っている。
- (ウ) (イ)の例と同様に、道元章においても、B 群では、他群が欠く文章を補っている。
- (エ) A 群で生じた道元章の錯簡を、修正しようと試みた痕跡が認められる（前述）。

これらの特徴は、B 群では、他群には記されていない本文が補いつつ、錯簡の修正をしようとした形跡を示している。(エ)のみは、道元章に錯簡の生じていない C 群や D 群を参照することで修正ができる。けれども、(ア)~(ウ)のような本文の補完は、C 群・D 群を参照しても行うことはできない。すると、B 群は現存する古本系統が派生する端緒となった写本（図 2 の T）をさらに遡及する 1 本（図 2 の S）を参照し、本文の修正を行ったことが示唆される。そして、B 群が参照した 1 本は、祖本ではないものの、大幅な脱文や錯簡の生じていない

写本であったと推定される（注 1）。

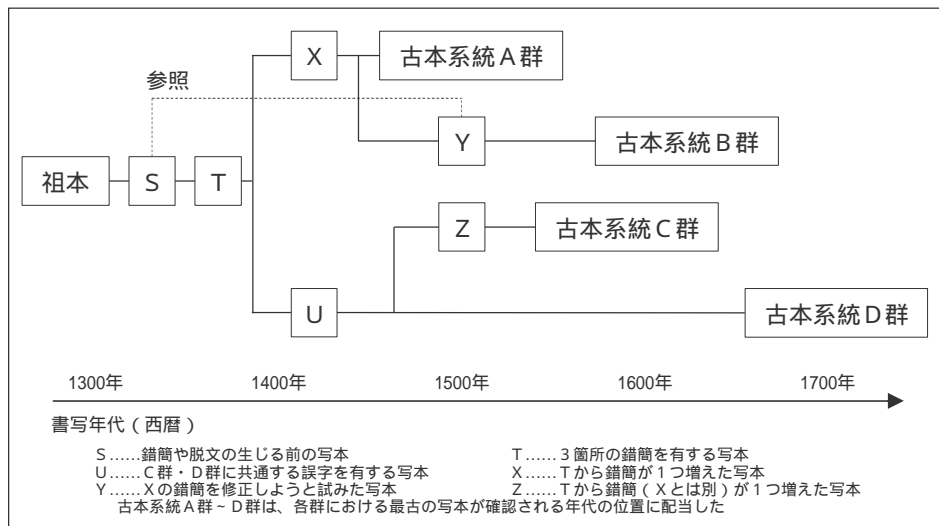


図2 本研究によって明らかとなった古本系統写本群の成立過程

以上を総合すると、B 群の本文は、現存最古の乾坤院本（15 世紀後半書写）を含む A 群から派生した本文であると同時に、他群を遡る写本（図 2 の S）の本文をも含んでいると言える。したがって、『伝光録』成立当初にもっとも近い本文を有するのは、B 群であると判断される。

本研究を通して得られた新たな知見を加味して、『伝光録』古本系統写本群の成立過程を図示すると、図 2 のようになる。

本研究により、古本系統写本群の関係性、そして本文の成立過程について、おおよその見通しを得ることができたと考えられる。古本系統に遅れて登場する中間本系統と流布本系統の成立過程については、いまだ十分な検討を行うことができていないが、本研究は中間本系統・流布本系統へアプローチするための予備的研究としての側面を担っている。今後は、中間本系統・流布本系統の本文への検討を行い、思想研究に最適な『伝光録』校本を作成し、日本中世における禅思想研究のための一素材の提供を目指していきたい。

【注】

- (1) 和漢混淆文で記される『伝光録』の本文を抄出し、漢文へ復元した『正法眼蔵仏祖悟則』（1366~1399 年に成立）の本文から、『伝光録』の祖本の段階では、脱文や錯簡はいまだ生じていなかったことが確認されている（拙稿「龍門寺所蔵『正法眼蔵仏祖悟則』の資料的価値(1)『伝光録』・『仏祖正伝記』との関係を中心に」、『駒澤大学仏教学部論集』48 号、2017 年）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 横山龍顯	4. 巻 21
2. 論文標題 樹神の観想 『伝光録』と『洞谷記』のあいだ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 曹洞宗総合研究センター学術大会紀要	6. 最初と最後の頁 129-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 横山龍顯	4. 巻 69
2. 論文標題 『伝光録』写本群の相互関係 龍泉寺本の紹介を兼ねて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 96-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.69.1_96	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 横山龍顯	4. 巻 49
2. 論文標題 瑩山禅師伝の再検討（1） 伝記資料の成立過程とその問題点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 禅研究所紀要	6. 最初と最後の頁 53-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 木村清孝・尾崎正善・宮崎展昌・古瀬珠水・小島裕子・横山龍顯・武井慎悟・永見達也・米野雄大	4. 巻 7
2. 論文標題 瑩山禅師『伝光録』 諸本の翻刻と比較（7）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 令和2年度鶴見大学仏教文化研究所共同研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 2-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山龍顯	4. 巻 22
2. 論文標題 瑩山禅師の城万寺昇住とその周辺 義演からの伝戒に注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 曹洞宗総合研究センター学術大会紀要	6. 最初と最後の頁 7-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山龍顯	4. 巻 70
2. 論文標題 近世成立の瑩山紹瑾伝における悟則とその典拠 中世太源派文献からの影響を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 219-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山龍顯	4. 巻 50
2. 論文標題 瑩山禅師伝の再検討 (2) 前生譚と出生地について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 禅研究所紀要	6. 最初と最後の頁 149-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山龍顯	4. 巻 51
2. 論文標題 瑩山禅師伝の再検討 (3) 永平寺上山・諸方遊歴・城万寺住持就任	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知学院大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横山龍顯
2. 発表標題 『伝光録』写本群の相互関係 龍泉寺本の紹介を兼ねて
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山龍顯
2. 発表標題 瑩山紹瑾の『伝光録』をめぐる新たな研究動向
3. 学会等名 宗教文化学科・大学院文学研究科共催第6回研修会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山龍顯
2. 発表標題 瑩山紹瑾講述『伝光録』の成立と現存写本の本文系統
3. 学会等名 人間文化研究所研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山龍顯
2. 発表標題 中近世の曹洞宗をめぐる基礎研究について とくに瑩山紹瑾の研究史に注目して
3. 学会等名 曹洞宗をめぐる歴史と文化研究会第1回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山龍顯
2. 発表標題 『伝光録』古本系統の本文成立過程
3. 学会等名 東海印度学仏教学会第68回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山龍顯
2. 発表標題 『伝光録』古本系統の本文成立過程
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第73回学術大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関